

# 令和6年度 佐世保市保幼小連携アンケート調査に関する報告書

門田 理世(西南学院大学大学院)

諫山 裕美子(西南学院大学大学院生、久留米大学) 沖本 悠生(西南学院大学大学院生、九州産業大学)

佐世保市幼児教育センター

## 本アンケートの主な結果概要

- ▶ 佐世保市の全施設(園・学校)で89.0%の回収率で、回答者は昨年より増加し、395人となった。【p1】
- ▶ 乳幼児教育・保育施設と小学校及び義務教育学校間では連携度に対する認識の違いがみられ、そこから、佐世保市の先生方の保幼小「連携」に対する多様な捉え方が明らかとなった。【p2~3】
- ▶ 入学時に子どもが不安や戸惑いを感じていることが環境の変化を中心に人間関係や学習・生活環境の変化であること、それに対する先生方の様々な手立ての工夫や援助の具体的内容が明らかになった。【p4】
- ▶ 各園や各学校の実態に合わせて作成する「接続カリキュラム」は6~7割が作成済・作成中の段階であり、昨年度とほぼ同等の割合であった。【p6】
- ▶ 要録様式(佐世保版)改訂版が、市内で統一していることにより、特に受け取り側の小学校及び義務教育学校において意義を見出されていることや、佐世保市全体で子どもを育てていくツールとして活用されていることが示唆された。【p8】

※乳幼児教育・保育施設を「乳幼児」、小学校及び義務教育学校を「小」と表記する。

### 1. はじめに

本事業は、佐世保市と西南学院大学の包括的連携協定を基盤として継続しており、今年度で9年目を迎える。

これまでの研究調査結果を踏まえ、今年度も保育所、認定こども園、幼稚園(乳幼児教育・保育施設)と小学校及び義務教育学校とをつなぐ保幼小連携への意識や接続カリキュラムの作成、要録についての調査を行った。その結果を以下に報告する。

### 2. アンケート調査の概要

【調査対象】佐世保市内の全ての乳幼児教育・保育施設、小学校及び義務教育学校

【調査時期】令和6年5月~6月

【アンケート対象者】各園・各学校において複数の教職員に回答を依頼した。

【アンケート調査項目】「保幼小連携」・「要録」

の2つの大きな軸を中心に、設定した(表1)。

【アンケート方法】Google フォームまたは紙面による回答を依頼した。

【アンケート回答数】

昨年度、新たに Google アンケートを導入したところ、これまで7年間、約9割であった回収率が77%まで下がったが、今年度は全体で89.0%となり、昨年度より増加した(表2)。特に「小」は、97.9%で高い回収率であった。また、昨年より、個人回答数が全体で約100名増加した。各園・各学校から複数名が回答しており、「乳幼児」では1園あたり平均2.7人、「小」では1校あたり平均3.2人の回答があり、全施設のさらなる協力のおかげで、回収率が高まっている。

表1 アンケート調査項目

I 回答者の属性(現在の担当職、保幼小連携担当の有無等)
II 保幼小連携について
(1) 連携の度合い
(2) 保幼小連携を推進する意識の度合い
(3) 小学校入学への子どもが感じる不安や戸惑い
(4) 小学校入学への子どもが感じる不安や戸惑いへの対策
(5) 小学校入学への保護者へ向けた取組
(6) 園・学校独自の「接続カリキュラム」の作成・活用段階
(7) 園・学校独自の「接続カリキュラム」の作成・活用への今後の関与
(8) 保幼小連携を推進するために昨年度行われた交流と今後行いたい交流
III 要録様式(佐世保版)改訂版について
「小」(1) 今年の要録の既読の有無 (2) 要録を読む時期
「乳幼児」(3) 要録の作成方法 (4) 要録作成上の課題
「小・乳幼児」(5) 要録様式統一の意義や課題
IV アンケート調査に関する意見

表2 アンケート施設別回答数

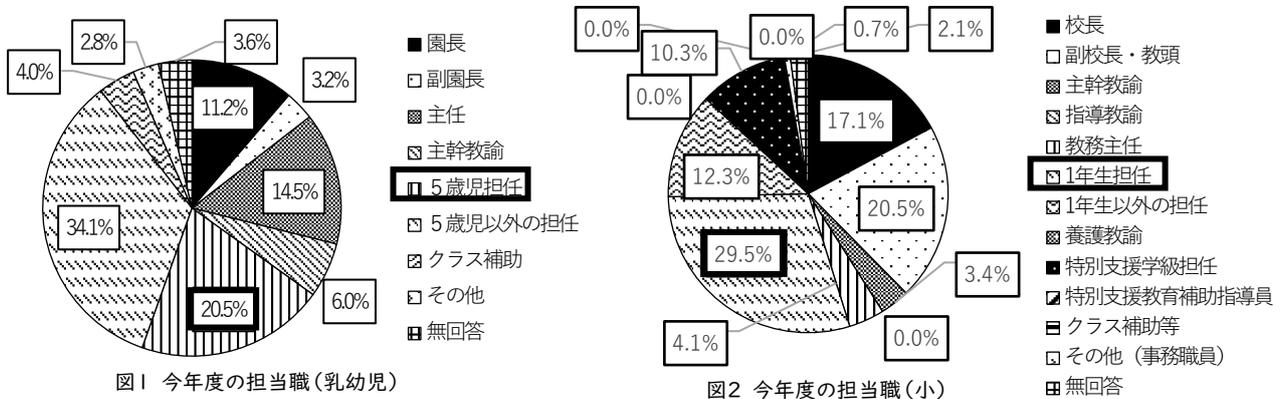
	送付 施設数	回答 施設数	施設回収率		個人回答数	
			R5年度	今年度	R5年度	今年度
乳幼児教育・保育施設	108	92	71.0%	85.2%	171	249
内						
保育所	55	48	76.3%	87.3%	98	121
地域型保育事業	4	4		100.0%		8
認定こども園	42	35	66.7%	83.3%	56	106
幼稚園	7	4	50.0%	71.4%	9	11
小学校	47	46	91.5%	97.9%	125	146
総数	155	138	77.3%	89.0%	296	395

### 3. 結果

#### I アンケート回答者の属性

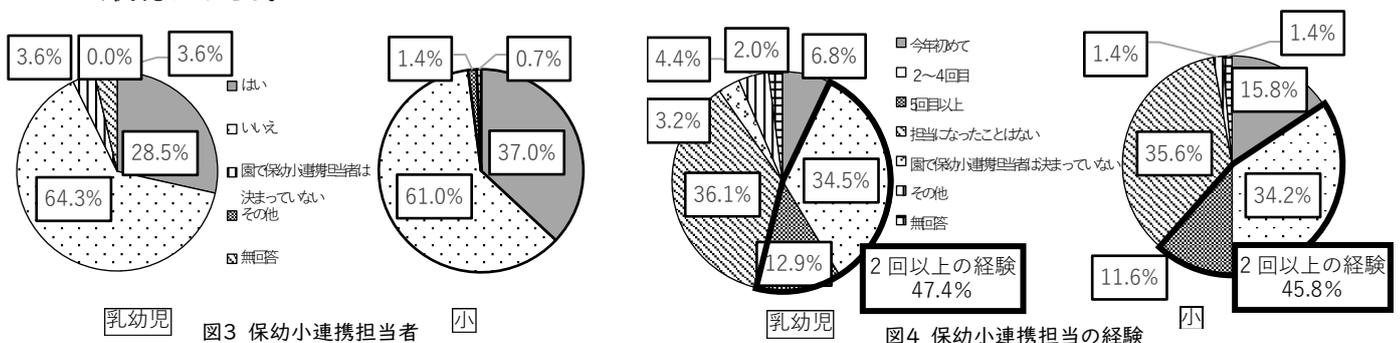
##### (1) 接続期の担任の回答が2~3割程度

回答者のうち、**乳幼児**の5歳児担任は全体の20.5%、**小**の1年生担任は29.5%であり、どちらの施設の回答者も、接続期(年長・小1)の担任の割合は2~3割程度と、昨年度と同等であった(図1・2)。よって、本アンケートの内容は、接続期担当以外の先生方の意見も反映されている結果といえる。



##### (2) 保幼小連携担当者の回答は2~3割程度

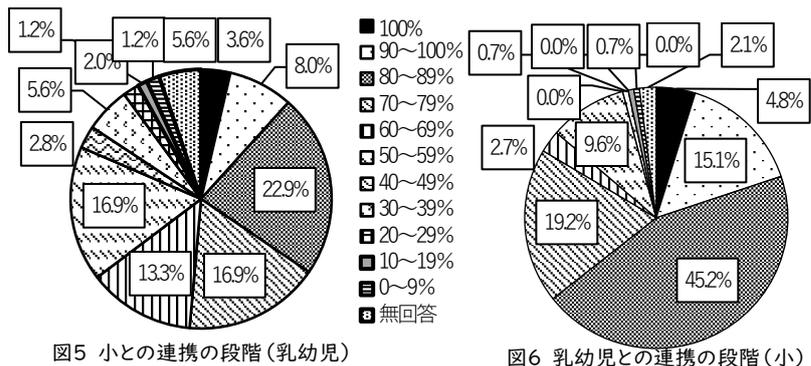
**乳幼児**の連携担当者は28.5%、それ以外の回答者が64.3%、**小**の連携担当者は37.0%、それ以外の回答者が61.0%であった。どちらの施設も、保幼小連携担当以外の回答者が全体の5~6割程度であり、アンケート全体の回答者の割合の中で保幼小連携担当者は2~3割程度であった(図3)。保幼小連携担当経験者の内、2回以上担当した経験のある者は、**乳幼児**はアンケート全体の回答者の割合の中で47.4%、**小**は45.8%と、経験者が5割弱であった(図4)。アンケート回答者の中で、保幼小連携担当を複数回している方は、**乳幼児**と**小**でほぼ同じ割合であり、半数に満たない。**小**の方は15.8%が初めて担当者になっていることから、保幼小連携担当が毎年変わっていく状況がみえる。



#### II 保幼小連携について

##### (1) 連携の度合い：小学校と乳幼児教育・保育施設で連携度に対する認識に差がある

近隣の園・小学校との連携について、100%を完全に連携できていると捉えた場合にどの程度進んでいると思うか、連携の度合いについて尋ねた。保幼小の連携度を「70%以上」と回答した者が、**小**は84.2%、**乳幼児**は51.4%であり、連携度に対する認識に差が見られた(図5・6)。保幼小連携は互いに共通して行われているにもかかわらず、連携の推進度の実感が異なっていることから、そこに歪みが生じているといえる。そこで、何をもって連携できていると捉



えているかを明らかにするために、「連携の度合い」の理由を自由記述で尋ね、意味内容ごとに分けて分析した(表3)。

その結果、連携が進んでいると捉えている基準、つまり、連携するとは何か、保幼小「連携」に対する捉え方が明らかとなった。70%以上の連携度と回答した者の理由に着目すると、連携が進んでいると捉えている理由として、『交流・訪問・行事の実施』、『連携の推進の段階や意識』、『情報や互いの教育・保育の共有』、『その他』が挙げられた。

『交流・訪問・行事の実施』では、乳幼児、小ともに交流が実施できていることで連携が取れていると捉えている回答者が最も多いことが分かった。交流に関しては、園児と児童の交流だけでなく、教職員同士の交流も含まれる。また、「一番近い地区の小学校との交流しかなく、他校との交流がなかなか取れず、情報交換が難しい」という乳幼児の意見にある通り、1園対1校の交流だけでなく、複数の園・学校との交流が実施できるよう望まれていることもうかがえた。

『連携の推進の段階や意識』では、園・学校間で連携が推進されているか、さらに積極的な連携や密な連携が行われているか、交流・連携がしやすいかが連携している実感に

つながっていることが明らかとなった。また「連携」に関して、接続カリキュラムに関する回答は少なかった。現在作成し、活用を始めている佐世保市の「接続カリキュラム」が連携の推進に活用できるのか、カリキュラムの様式や活用方法を実態に合わせて修正・検討していく必要があるのではないかと考える。

『情報や互いの教育・保育の共有』では特に、乳幼児と小の間で情報交換ができる機会や場があることを、連携が進んでいると捉える回答が最も多いことが分かった。「保幼小の担当者会では、近くの幼稚園、保育所、小学校と顔合わせを行い、交流の計画、情報交換もできた」という意見にある通り、文面でのやりとりでなく、対面で意見交換できることが、先生方の連携に対する意識の向上につながっていくと推察された。

「連携の度合い」の理由から、佐世保市の先生方の「連携」に対する多様な捉え方が明らかとなった。その多様な捉え方が、連携ができていると捉える、乳幼児と小の間の実感の差につながっていることが考えられる。今後連携をより推進していくためには、「連携する」とはどういうことか、具体的な共通理解が必要であろう。

表3 近隣の園・小学校との「連携の度合い」の理由

カテゴリ	焦点コード	乳	小
交流・訪問・行事の実施	交流・訪問の実施	28	14
	交流の回数	6	1
	定期的・計画的な実施	12	12
	行事への参加	6	6
	職員の交流・連携	2	9
	子どもの交流の実施	2	3
	近隣・複数の園・学校との交流の実施	2	8
	活動の実施・定着		3
	全学年での交流の実施		2
	連携の推進の段階や意識	連携の推進	13
	積極的な連携	6	
	密な連携	8	3
	十分な連携	1	1
	交流・連携のしやすさ	5	2
	複数の園・学校との連携の推進	3	2
	接続カリキュラムの作成・活用	2	1
	連携への意識		2
	連携による効果の実感	1	2
	継続的な連携		1
情報や互いの教育・保育の共有	情報の共有・交換	22	44
	子どもの姿の共有	5	1
	授業・保育の参観	4	4
	指導の共有	3	2
その他	(分からない、今年度初めて、など)	4	7

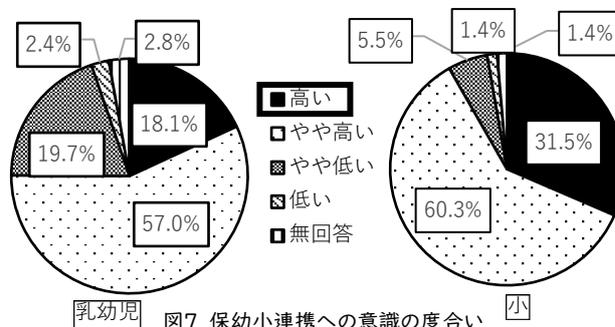
## (2) 回答者が保幼小連携を推進する意識の度合い

： 乳幼児教育・保育施設と小学校で、保幼小連携を推進する意識の高さに、差がある

回答者自身が保幼小連携を推進する意識の度合いを4段階で尋ねたところ、連携への意識が「高い」と回答したのは乳幼児が18.1%、小では31.5%で、乳幼児と小で意識の高さに差があった(図7)。

回答者自身の保幼小連携の意識の度合いの理由を自由記述で尋ねたところ、保幼小連携を推進する意識が「高い」「やや高い」と回答した人は、[連携の重要性や必要性の認識]を持っていること、現在[連携が行われている実態]があること等を挙げていた。[連携の重要性や必要性の認識]には、連携が子どものためになる、スムーズな移行のためには大切、日頃の指導・保育に生かすことができる等の理由があった。現在[連携が行われている実態]は、現在交流ができている、密に連絡が取れる・その体制がある、情報共有ができている、計画的に実施できているという、連携の実態が保幼小連携の意識の高さに影響していることが推察された。

その一方、保幼小連携を推進する意識が「低い」「やや低い」と回答した人は、[多忙である現状]、[担当でない場合の関わり方や意識]等を挙げていた。毎年、「なかなか時間がない」「日常の業務が忙しい」という多忙な現状



が明らかとなっているが、その現状に対して、今後どのように日頃の活動や業務の中に保幼小連携の取り組みを取り込んでいくかが課題であると考え。また、[担当でない場合の関わり方や意識]については、「未満児の担当でなかなか参加することが少ない」という、接続期や保幼小連携担当ではない場合の関わり方の難しさを感じている回答者がいることも明らかとなった。さらに「自分からどう働きかけていいのかが分からない」、「連携の大切さは理解しているが、なかなか行動にうつせていない」という意見も見られたため、いかに園や学校全体で共通理解を図り、自分事として捉えながら、全職員で連携を推進していくことができるようにしていくかが、今後の課題である。

### (3) 小学校に入学する際、子どもが感じる不安や戸惑い：「環境」の違い・変化が最も多いキーワード

小学校に入学する際、子どもが感じる不安や戸惑いを自由記述で尋ねた。乳幼児237、小141名の回答があり、細かい意味に分けた732の言葉を分析した(表4)。

回答の中では「環境」という言葉が最も多く、カテゴリでも『園と小学校の環境の違い』が一番多い回答である。この「環境」は広義に使われる言葉であるが乳幼児教育では特に「環境を通して保育を行うのが基本」とされ、子どもを取り巻くすべてのものを環境ととらえる。その意味で考えると、それ以外のカテゴリの人間関係や学校生活、学習環境等も環境に含まれるため、回答者が記入した[環境の変化・違い]の「環境」の言葉には様々な意味が含まれている可能性が高い。

2番目に多い『人間関係の構築』では、友達、教師や上級生などの異学年の児童との関わりが挙げられた。入学する小学校に知り合いが少ないことや、友達や教師との新たな人間関係を作っていくことに対する不安は子どもにとっても大きい。特に、教師との関係性について、その距離感や、先生への不安などが乳幼児から挙げられた。『学校生活の方法や内容の変化』では、登下校、生活リズム、給食などが挙げられた。[登下校の変化]については、園では保護者と登園する子どもが多く、一人で行くことやバスや車ではなく歩いていくこと、その距離の遠さへの心配である。また、給食でも食べきれぬのか、時間が間に合うかなどは、特に小の先生が考える子どもの不安として多く挙げられた。[生活リズムの変化]は、乳幼児に多かったのが特徴的である。

『学習環境・学習内容の変化』では、[学習の変化]だけでなく、適応できているか、座学で学習を行うこと、学習時間等、様々な子どもの不安や戸惑いが挙げられた。『学校生活の規律や枠組み』では、特に小の回答が多かった。時間割があることや時間の区切りがあること、学校におけるルール、人数の多さなどが挙げられた。『家庭での課題』としては、「保護者にもっと小学校の話をしてほしい」、「保護者の不安が子どもに伝わっている」などが双方の施設から挙げられた。

双方が考える子どもの不安や戸惑いは、共通して挙げられているものが多かった。つまり、接続期の子ども理解において乳幼児も小も共通の認識をもっているといえる。その話題は、今後子どもの不安や戸惑いを減らしていく保幼小連携を進めていくうえで、話し合いのきっかけとなりうる。

### (4) 小学校に入学する際の子どもの不安や戸惑いを和らげるために必要なこと

：子どもの不安への対応策が多く出された乳幼児、小でそれぞれ取り組むことが可能な内容

上記質問に続いて、小学校に入学する際の子どもの不安や戸惑いを和らげるために必要なことを自由記述で尋ねた。乳幼児225、小141名の回答から、意味単位ごとに分けて分析を行った(表5)。大きく分けると、入学前の取組、入学後の取組、保幼小連携や家庭の支援の枠組みがある。

表4 入学時に子どもが感じる不安や戸惑い

カテゴリ	焦点コード	乳幼児	小
園と小学校の環境の違い	環境の変化・違い	106	40
	未経験の環境や経験	19	10
	場所・施設	12	4
	学校のもつ文化や雰囲気	2	5
	慣れた園生活からの変化	4	0
人間関係の構築	友達との出会い・関係構築	63	27
	教師との関係	34	7
	新しい人間関係	17	8
	園時代から変化する人間関係	14	2
	異学年の児童との関わり	2	4
学校生活の方法や内容の変化	登下校の変化	20	11
	生活リズムの変化	27	3
	学校生活への適応・見通し	19	10
	給食の時間や量	10	16
	生活の変化	7	7
	学童保育	1	0
学習環境・学習内容の変化	学習の変化	28	21
	学習への適応	15	9
	座学による学習形態	13	11
	園と学校の教育の違い	11	5
	学習時間の長さ	1	5
	学習方法	0	3
学校生活の規律や枠組み	時間の枠組みの違い	10	25
	ルール・規律	2	13
	集団による生活	6	8
	園のルールや生活との違い	7	7
家庭の課題	家庭での環境調整不足	4	7
育ちの違い	子どもの育ちの個人差	5	2
園ごとの違い	園ごとの違い	1	2

『入学前の小学校体験』は双方から最も多く回答された。子どもが環境の変化に戸惑いを感じていることを考えると、実際に小学校に足を運ぶことの大切さを双方が実感している。また、「複数回小学校に行き慣れるようにする」といった可能な限り小学校を訪れ、環境に慣れることが望ましいという回答も多く見られた。

『子どもの自身の準備』と『入学前の乳幼児教育・保育施設での取組』では、園で見通しを持てるような保育を進めたり、子ども自身が小学校への理解を進めることができるように説明したりと、子どもの不安への対応策が多く出てきた。

小学校側でできることとして『入学後の小学校での取組』は、焦点コードの種類が最も多かった。その中で、[子どもの関わり方の意識や工夫]の焦点コードをより詳しくみると、教職員の様々な工夫がみられる。[乳幼児]では小学校の先生に、子どもを一人の「個」としてとらえ、受け止めたり接したりすることや、一人一人に日常的に関わってもらいたいという回答がみられた。[小]では、子どもを認め、励まし、スモールステップで繰り返し指導をしていく大切さや、見通しをもてるようにすることなど、子どもの思いに寄り添って段階を踏んだ関わりが大切だと意識していることがわかった。これらは今後の1年生への関わり方のヒントとなると考える。

またここでは、『保幼小の連携・教職員の交流・連携』として、[乳幼児]・[小]の双方の教職員の連携の大切さも見出された。具体的には、子どもの情報共有や互いの教育・保育の理解、交流等を通して教職員が連携することが、子どもの入学時の不安や戸惑いを和らげる手立てとなりうることが示された。同じく、『家庭との連携・家庭支援』も必要であることが双方から出されている。

表5 子どもの不安や戸惑いを和らげるために必要なこと

カテゴリ	焦点コード	乳幼児	小
入学前の小学校体験	小学校への訪問・体験	59	27
	小学校における交流活動	38	5
	小学生との交流	3	2
子ども自身の準備	子どもの小学校への理解	27	8
	子どもに必要な力	10	2
入学前の乳幼児教育・保育施設での取組	小学校への期待や安心感を高める取組	14	
	小学校を意識した活動・保育	11	5
	小学校を意識した生活・環境の調整	11	4
	他園の子どもとの交流活動	9	1
	遊びを中心とした保育の充実	3	1
	小学校区外の子どもへの対策	2	
	子どもへの関わり方の意識や工夫	28	30
	小学校における授業・活動の工夫	8	10
	安心感ももてる関わり・関係構築	7	1
	時間をかけて段階的に慣れていくこと	7	13
入学後の小学校での取組	安心できる環境・居場所づくり	5	5
	子どもと関わる先生の人数調整	3	6
	小学校教育側の意識のもち方		3
	学校の受け入れ体制・学級編成		2
	小学校での適切な環境構成	1	1
	個別の情報共有と対応の検討	13	12
	保幼小の連携	7	7
	教職員同士の共通理解・連携	4	3
	教職員の園・学校訪問や互いの教育の理解	4	3
	接続カリキュラムの検討・活用	1	6
保幼小の連携・教職員の交流・連携	連続した教育・環境の調整	1	4
	保護者による対応・就学準備	9	4
	先生と保護者の連携や対応	8	9
	保護者への情報提供	1	8

[子どもの関わり方の意識や工夫]のオープンコード	<小のオープンコード>
<乳幼児のオープンコード>	子どもを認め、励ますこと(6)
「個」として受け止め、接してもらうこと(7)	丁寧で優しい関わりや指導(5)
日常的な関わりや声かけ(6)	見通しをもって行動できるような言葉かけ(4)
子どもが安心してできる関わり(5)	個別の対応・支援(3)
不安な気持ちに寄り添い、子どもの話を聞く(5)	指導への意識(3)
子どもの気持ちに寄り添った援助(2)	スモールステップで繰り返し指導(2)
丁寧で優しい関わり(2)	わかりやすい指導や援助(2)
	子どもが安心してできる関わり(1)
	子どもが達成感や充実感を感じられる関わり(1)
	子どもの気持ちに寄り添った援助(1)

### (5) 小学校の入学に際して、保護者に向けた取組：それぞれの長所を生かした取組

ここで、保護者に対してはどのような支援を行っているのかを明らかにするために、保護者に向けた取組の有無を尋ねた(図8)します。[乳幼児]では4割が取組があると回答し、その具体的な内容として、「個人懇談、登降園時の会話」「保護者懇談会」「園だより・クラスだより」等がみられた。また、「小学校児童をもつ保護者との交流」も特徴的である。保護者との近さを生かした日常的な関わりや、園独自の取組が挙げられた。[小]では、8割弱があると回答、「入学説明会」が多く記述された。入学説明会はどの小学校でも行うことであるが、その中で「入学前に身に付けてほしいことを伝える」「スライドの工夫」「学校見学」「保護者の心構えを伝える」など、既存の会の中での工夫をされている。他にも「子育て講座、講演会」「保護者の交流を深める場の提供」等、学校独自の取組が挙げられた。

### (6) 接続カリキュラムの作成・活用段階：6～7割が園・学校独自の「接続カリキュラム」を作成済・作成中

ガイドラインを基に各園や各学校の実態に合わせて作

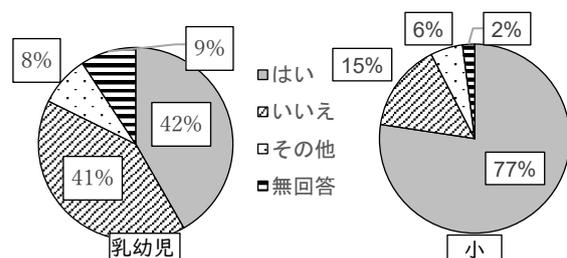


図8 保護者に向けた取組はあるか

成する「接続カリキュラム」の作成・活用段階を尋ねたところ、双方ともに6～7割が作成済または作成中の段階であり(表6)、昨年度と比較しても、その割合は乳幼児と小とも同等であった。また、既に完成して活用していると回答したのは、小は55.5%、乳幼児は37.3%で、小の方が接続カリキュラムの作成・活用が進んでいる。

しかし、どちらの施設も、④園・校内で共通理解はしているがまだ取り組めていない、⑤共通理解に至っていないなど、作成に至っていない施設があることが明らかとなった。また、⑦よくわからないの回答が2割程あり、これは昨年度よりも増加している。このことは、園内・校内において接続カリキュラムが作成されているかどうかに対しての共通理解が持たれていないことを示唆しており、まずは接続カリキュラムの内容を校内・園内で共有することが求められる。

表6 園・学校独自の「接続カリキュラム」の作成段階

作成の段階	乳幼児	小
①既に完成して活用	93 (37.3%)	81 (55.5%)
②作成済、活用まだ	57 (22.9%)	24 (16.4%)
③現在、作成中	12 (4.8%)	8 (5.5%)
④共通理解済、作成まだ	10 (4.0%)	1 (0.7%)
⑤共通理解まだ	19 (7.6%)	6 (4.1%)
⑥作成予定なし	6 (2.4%)	1 (0.7%)
⑦よくわからない	47 (18.9%)	23 (15.8%)
⑧その他	1 (0.4%)	0 (0.0%)
無回答	4 (1.6%)	2 (1.4%)

### (7) 接続カリキュラムの作成・活用への関与の意識：接続カリキュラムをよりよく活用したいという意見が多数

園・学校独自の接続カリキュラムの作成・活用段階を踏まえ、今後、回答者自身が接続カリキュラムの作成や活用にどのように関わっていきたいかを探った。乳幼児165、小117の自由記述回答を意味内容ごとに分けて分析した(表7)。

その結果、全体で最も多かった[接続カリキュラムのよりよい活用]の項目では、子どもの声を聴いたり、子どもの不安に寄り添ったり、子どもや地域の実態に合わせてたりすることを意識して、接続カリキュラムを活用できるようにしていきたいという意見が挙げられた。作成した接続カリキュラムを、子どもや地域の実態に応じて、柔軟に活用していきたいという先生方の意識がうかがえた。

表7 「接続カリキュラム」の作成・活用への関与の意識

焦点コード	乳幼児	小	全体
接続カリキュラムのよりよい活用	26	23	49
接続カリキュラムの検証・改善	17	30	47
接続カリキュラムの共通理解	35	11	46
連携・接続の強化・促進	23	21	44
自身の積極的な関わり	17	16	33
接続カリキュラムの個人的理解の促進	21	4	25
保育・指導への活用	19	6	25
その他(分からない等)	8	6	14

次いで多かった[接続カリキュラムの検証、改善]の項目では、接続カリキュラムの作成後に評価・検証し、課題を見つけて改善していくための体制・組織を構築することが挙げられた。また、接続カリキュラムの具体的な振り返りの方法として、その年度の活動を振り返って朱書きで更新したり、必要だと感じる項目を付け足したりするなどして、その園・学校独自の接続カリキュラムをそれぞれに適した方法で、改善していこうとする先生方の姿勢がみられた。

[接続カリキュラムの共通理解]の項目では、校内・園内全体・保幼小での共通理解のみならず、回答者自身が接続期担当者や保幼小連携担当者との共通理解を図りたいという意識が挙げられた。「業務量的に作成に関わることは難しい。会議に上がった自分事として聴く。もしくは、接続カリキュラムについて校内研修で時間をとるように働きかけることはできなくはない。」という意見からは、保幼小連携の取り組みに対する意欲はあるが、接続期担当者や保幼小連携担当者だけで行われている現状があることもうかがえる。立場によっては接続カリキュラムの作成・活用に関わるのが難しい場合があるとしても、それぞれの立場からその作成・活用への関与を考え、具体的な行動をとっていくことが今後求められる。

### (8) 保幼小連携を推進するために昨年度行われた交流と、今後行いたい交流

佐世保市では、保幼小連携担当者が年に2回、行われている。これまでの調査で、その機会以外にも交流が必要であるという意見が出ていたため、実態を調査することとした。この節では、昨年度行われた交流と、今後行いたい交流について選択項目を作成し、複数回答可として尋ねた。以下、子ども同士の交流と、教職員同士の交流に分けて説明する。

#### ① 子ども同士の交流：園児と児童の交流活動を、双方ともに必要と感じている。

子ども同士の交流に関する回答が表8である。保幼小連携に関わっていない者を含めた全回答者の回答結果でも、「園児／小学生との交流活動」が9割前後になったことは、交流活動のニーズの高さがうかがえ、交流活動を続けていく必要があるといえる。

また、「近隣の行事と一緒に参加する」という回答も双方がより増やしたいと考えていた。

乳幼児のみに尋ねた「近隣の乳幼児施設同士の園児との交流活動」は、44.6%が

今後行いたいと回答している。(3)の入学時の子どもの不安や戸惑いについて、友達関係、他園との交流活動を求める声が上がってきていたが、具体的な求める活動でも高く出た。少子化問題も含め、同学年の子ども同士の関わりは、園を超えて地域で行っていく必要があるという重要な課題であるといえる。

表8 子ども同士の昨年度の交流と、今後行いたい交流（複数回答）

	乳幼児		小	
	昨年度	今後	昨年度	今後
〔小学生/園児〕との交流活動*	86.3%	85.9%	88.4%	91.1%
地域の行事に近隣の〔小学生/園児〕等と一緒に参加	19.7%	34.5%	13.0%	24.0%
近隣の乳幼児施設同士での園児との交流活動	17.7%	44.6%		
その他	8.0%	2.0%	4.1%	1.4%
無回答	2.8%	4.8%	6.2%	2.7%

\*乳幼児には「小学生」、小には「園児」と尋ねている

## ② 教職員同士の交流：現状の実施内容の数値は低い、「今後より交流をしていきたい」という結果

教職員同士の交流については、11項目を尋ねた(表9)。「接続カリキュラムの見直し・改善」は、どちらの施設も現状は低いが、今後する必要がありととらえている。また、「交流計画の協議」については、小の今後に関する値が低くなっている。別のアンケート項目や、担当者会の際の意見で、「小学校区にするといつも小学校側が計画するため負担となっている」という意見が挙げられている。①で子どもの交流活動は望まれているが、片方のみの負担では、持続可能な交流にはならないため、乳幼児側も積極的に交流活動を提案することが望まれる。

表9 教職員同士の昨年度の交流と、今後行いたい交流（複数回答）

	乳幼児		小	
	昨年度	今後	昨年度	今後
接続カリキュラムの検討・協議	28.5%	28.5%	21.9%	24.0%
接続カリキュラムの見直し・改善	8.4%	25.3%	11.6%	30.8%
交流活動の計画の協議	40.6%	37.8%	53.4%	39.7%
〔小学校/園〕との入学前の連絡会	67.1%	61.8%	61.0%	58.2%
〔小学校/園〕との入学後の連絡会	55.0%	59.0%	48.6%	44.5%
定期的職員交流	2.8%	17.3%	5.5%	16.4%
不定期的職員交流	4.4%	21.7%	6.2%	19.9%
〔小学校/園〕の〔授業/保育〕参観	25.3%	43.0%	4.1%	30.8%
〔小学校/園〕の〔授業/保育〕参観に招待	2.4%	26.1%	28.8%	42.5%
〔小学校/園〕の行事への参加	41.0%	49.8%	11.0%	21.9%
〔小学校/園〕の行事に招待	15.3%	32.5%	48.6%	41.1%
その他	7.6%	2.4%	3.4%	0.0%
無回答	6.8%	4.8%	6.2%	2.1%

\*乳幼児には「小学校の授業参観」、小には「園の保育参観」と尋ねている

次に、定期・不定期的職員交流、それぞれの授業・保育参観については、双方ともに、現状よりも今後の希望が高いことが明らかになった。特に、昨年度 4.1%だった保育参観を、小の 30.8%が希望しているなど、実際の参観を望む姿勢が浮き彫りになった。今後、いかに交流できる場を設けることができるかを検討することが肝要である。

## Ⅲ 要録様式(佐世保版)改訂版について

### (1) 小要録の既読率：例年同様、要録は高い水準で読まれている

今年度入学した1年生の要録の既読率を表10にまとめた。例年と同様、1年生や管理職の約95%以上が目を通してあり、要録の既読率が高い。1年生以外の担任の既読率が低いのは例年と同様であるが、今年度は、1年生や管理職の中にも「これから読む」、「読むことはほとんどない」といった要録を読む意識が低い回答がみられた。

表10 今年度入学した1年生の要録の既読率(小)

	全員分読んだ	把握した	簡単に全体を	数人分読んだ	これから読む	ほとんどない	読むことはない	その他	無回答
1年生担任	67.4%	23.3%	4.7%	2.3%	2.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
校長	60.0%	40.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
副校長・教頭	63.3%	23.3%	3.3%	3.3%	3.3%	3.3%	0.0%	0.0%	0.0%
主幹教諭・教務主任	18.2%	45.5%	9.1%	18.2%	9.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
特別支援学級担任	13.3%	20.0%	13.3%	13.3%	20.0%	6.7%	13.3%		
1年生以外の担任	0.0%	0.0%	5.6%	5.6%	77.8%	11.1%	0.0%		
その他	0.0%	0.0%	25.0%	0.0%	50.0%	0.0%	25.0%		
総計	45.9%	24.0%	5.5%	4.8%	15.1%	2.7%	2.1%		

(2) **小**要録を読む時期：入学前が最も多い

今年是要録を読む時期を複数回答可で尋ねた(表11)。読む時期としては、入学前までが最も多い。

職種ごとにみると、全ての職種で時期は不定期で読むという回答が出された。この回答から、要録の存在が認知され、必要に応じて活用されていることがわかる。

表11 要録を読む時期(小) ※複数回答

	① 受け取ってすぐ (3月末まで)	② 4月1日～入学式まで	③ 入学後、5～6月	④ 夏休み	⑤ 何か問題があった時に読む のて時期は不定期	⑥ その他	無回答
1年生担任	14.1%	40.8%	28.2%	5.6%	8.5%	1.4%	1.4%
校長	37.9%	34.5%	20.7%	0.0%	6.9%	0.0%	0.0%
副校長・教頭	34.1%	34.1%	19.5%	0.0%	9.8%	2.4%	0.0%
主幹教諭・教務主任	30.8%	30.8%	15.4%	0.0%	15.4%	0.0%	7.7%
特別支援学級担任	6.3%	25.0%	12.5%	0.0%	18.8%	12.5%	25.0%
1年生以外の担任	0.0%	16.7%	0.0%	0.0%	50.0%	16.7%	16.7%
その他	33.3%	0.0%	33.3%	0.0%	0.0%	33.3%	0.0%

(3) **乳幼児**要録のパソコン作成・保存  
：要録作成は、パソコンでの作成が増加

**乳幼児**に要録の作成方法を尋ね、園ごとの回答を集計した。「パソコンで作成」が79

(85.9%)、「保育者によって手書き・パソコンは様々」が8(8.7%)、「手書きで作成」が3(3.3%)だった。昨年度、パソコンでの作成は77.6%だったため、要録は年々パソコンでの作成が増えている。

(4) **乳幼児**要録の課題や困っていること：毎年、保育者は悩みながら要録を工夫して作成している

\*「」内の()は、回答数を表す

**乳幼児**に尋ねた「要録の課題や困っていること」について、書かれた回答125のうち、「特になし」や「わからない」を除いた90の回答を分析した(表12)。その結果、大きく7つに分類された。例年と同じような内容である。[子どもの情報を書く上での難しさ]には、「子どもの課題・困り感の記入(11)」「記述内容に関する判断(5)」「保護者への開示を想定した書き方(5)」「1枚の枠内にまとめる難しさ(5)」の4つが挙げられた。保護者への開示を想定した書き方についての言及は、これまでより記述が多かった。

焦点コード	回答数
子どもの情報を書く上での難しさ	34
書く際の意識や工夫	17
小学校における要録の活用	12
様式についての疑問・意見	12
園内における検討課題や意識	9
PCによる不具合や難しさ	8
書く内容に関する研修やマニュアル	4

[書く際の意識や工夫]の「わかりやすく簡潔にまとめること(12)」は、例年最も多く記述される回答で、先生方が配慮したり意識したりしている部分である。また、小学校における要録の活用については、今年度も挙げられた。

(5) **乳幼児** **小**要録の意義と課題：佐世保市の統一要録によって、子どもの育ちを同じ視点で見られる

要録様式を3つの施設で統一した「要録様式(佐世保版)改訂版」の導入から5年が経過した。そこで、「要録の意義と課題」について自由記述で尋ねた。乳幼児131名、小103名が記述した回答から、4つに分類された(表13)。

表13 要録の意義と課題(オープンコードの回答数3以上)

最も多く出されたのが[受け取り側の意義]である。「見やすい」「わかりやすく良い」の2つは保幼小共通で多かった。「小学校側が理解・認識しやすい」は**乳幼児**の意識の高さが表れた。一方で、「子どもの姿が把握しやすい」「読みやすい」は小学校側の評価である。また、「複数の園からの情報も統一されわかりやすい」は、多くの園の要録を見る**小**だけでなく、**乳幼児**からもその良さが挙げられた。乳幼児は要録を、ただ自園と小学校とのやりとりだけでなく、近隣の園の子どもたちと一緒に小学校に上がっていくためのつなぎの役割を果たしていると考えている。

	オープンコード	乳幼児	小
受け取り側の意義	見やすい	20	8
	わかりやすく良い	13	11
	小学校側が理解・認識しやすい	17	3
	子どもの姿が把握しやすい	2	13
	読みやすい	1	11
	複数の園からの情報も統一されわかりやすい	6	7
	比較がしやすい		5
	指導に生かしやすい		4
	書きやすい・記入しやすい	9	
	小学校に伝えやすい	4	
書く側の意義	同じ内容を記述できて良い	2	2
	研修が受けやすくわかりやすい	3	
	作成しやすい	3	
	統一の視点で記入ができる	3	
市内共通であることの意味	子どもの育ちを見る視点が統一される	3	12
	様式の統一は意義があり良い	2	8
	市内で統一できている良さ	6	1
	保幼小の連携に活用	3	1
課題	共有しやすい	3	1
	現行のままでよい	2	1
	園同士の差異を埋める必要性	6	2
	利用システムにより二度手間になる	5	
	書き方のガイドが必要	3	
	枠が狭いため書きにくい・収まらない	3	
	小学校教諭が見ていない	2	1

[書く側の意義]は主に**乳幼児**からの意見で、「書きやすい・記入しやすい」「小学校に伝えやすい」「統一の視点で記入ができる」などのメリットが出された。

[市内共通であることの意味]の「子どもの育ちを見る視

点が統一される」は、特に「小」の回答が多かった。小学校の先生が、子どもを理解しようとしている意識の高さがうかがえる。様式を統一しているからこそ、子どもの育ちをみる視点にまで意識を向けることができている。また、市内での転園時に移行しやすいことや保幼小連携に活用できる意義も挙げられた。

以上から統一された要録様式佐世保版は、佐世保市が一体となって子どもを育てるツールとしての役割をもち、子どもの育ちの視点が深まることにより佐世保の子どもの育ちを保障できる意義をもつことが示唆された。

〔課題〕では38の意見があった。「園同士の差異を埋める必要性」では、園による書き方の差はみられるようで、佐世保市全体での研修等の取組は続けていく必要がある。また、「利用システムにより二度手間になる」は近年活用されている保育支援アプリ等が園ごとに違うことによる意見だと推測される。園で使用しているシステムを利用して要録を作成できると効率が良いと思われるが、要録が小学校への引継ぎとして重要な役割を果たしていることを踏まえると、引き続き「要録様式(佐世保版)改訂版」を使用していただきたい。

#### IV 保幼小連携に関するアンケート調査と結果報告に関して

昨年と同様に、昨年度の報告書を読まれたかを尋ねた(図9)。昨年度アンケートより若干認知度が高くなり、読んでいる人も上昇した一方で、「関心がない」という回答もある。本アンケートはあえて接続期との関わりが少ない先生方にも回答を依頼しているが、そのねらいとして、保幼小連携への関心を高めることが一つにある。誰もが保幼小連携の担当者・関係者になる可能性への意識や、園・学校全体で保幼小連携に関わる意識の醸成を続けていきたい。そのほか、保幼小連携や本アンケート調査に関する意見を尋ねたところ、「乳幼児」16、「小」12の回答が得られた。紙面の都合上、内容は割愛するが、施設長会においてはその意見を紹介した。特に、「園ごと、小学校ごとの意識の差・温度差、なかなか共通理解が進まない」という意見は複数あり、担当者の変更による停滞や、学校・園の風土などで差がみられる現状も示唆された。

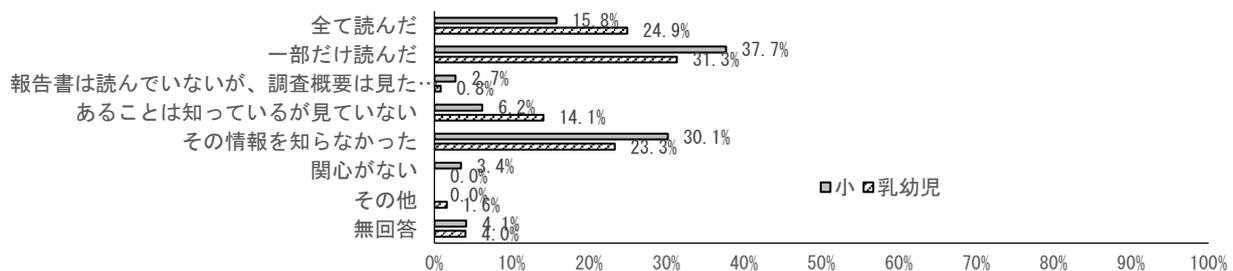


図9 昨年度の報告書の既読

アンケートの最後に、インタビューの協力者を募ったところ、協力の申し出を複数いただいたことに感謝したい。報告書作成時点でまだ実施に至っていないが、今後、具体的な保幼小連携の課題や道筋を見つけるべく、引き続き研究調査を計画し、進めていきたい。

#### 4. まとめと今後の課題

- 乳幼児教育・保育施設と小学校及び義務教育学校の間で、佐世保市の先生方の保幼小連携の捉え方に対する認識に違いがあることが明らかとなったため、「連携する」とは何を指すのか、その共通理解を図ることが望まれる。
- 子どもが入学する際の不安や戸惑いが明示され、その解決策についてもヒントが示された。接続期においては、子どもの人的・物的な環境や生活が大きく変わる。その変化に対して子どもが抱く不安や戸惑いに寄り添い、具体的な手立てを乳幼児教育・保育施設と小学校及び義務教育学校、双方から意識的に言い、対等に共有していくことが、滑らかな接続への一歩となると考えられる。
- 今後の保幼小連携については、これまでと同様に「子どもの交流活動」や「入学前連絡会」をすることに加えて、定期・不定期の職員交流や、双方の保育・授業参観を希望する声もあったので、これを機に教職員の交流を積極的に進めていきたい。
- 佐世保市で要録様式が統一されていることにより、佐世保市の中で子どもを育てていくための育ちをみる視点や、接続の土台として要録様式の統一が佐世保市の強みとなっていることが明らかとなった。以上